

ラテン語とフランス語

古典作品を素材に【14】

キケロ『老境論』より ― 動詞の「接続法」をめぐって ―

秋山 学

今月はキケロ『老境論』から、大カトー（前234-149）のスピーチを取り上げます。

原文 ① *Cyrus quidem apud Xenophontem eo sermone quem moriens habuit, cum admodum senex esset, negat se umquam sensisse senectutem suam imbecilliores factam quam adolescentia fuisset.* ② *Ego L. Metellum meminisse puer, qui, cum quadriennio post alterum consulatum pontifex maximus factus esset, viginti et duos annos et sacerdotio praefuit, ita bonis esse viribus extremum tempore aetatis ut adolescentiam non requireret.* ③ *Nihil necesse est mihi de me ipso dicere, quamquam est id quidem senile aetate nostrae conceditur.* — *De senectute*, IX 30.

仏訳 ① Quant à Cyrus, dans le discours que Xénophon lui prête avant sa mort, à un âge très avancé, il déclare n'avoir jamais senti que sa vieillesse fût devenue plus faible que l'avait été son adolescence. ② Et je me souviens d'avoir vu dans mon enfance Lucius Metellus, qui, créé grand pontife quatre ans après son deuxième consulat, exerça ce sacerdoce pendant vingt-deux ans, conserver à la fin de sa vie des forces telles qu'il n'avait pas à regretter le temps de son adolescence. ③ Il est inutile que je parle de moi-même, bien que ce soit le propre des vieillards et qu'on le pardonne à notre âge.

訳 ① キュロスは、クセノフォンの著作の中では、死の直前に行った訓示において、当時王は大変な高齢にあったのだが、自分は自らの老境が、青年期のあり方に比べて、弱々しいものとなったと感じたことは一度もない、と述べている。② わたしはルキウス・メテッルスのことを覚えていた。その頃わたしは少年であったが、彼は二度目の執政官職を務めてから4年後に最高神祇官となり、22年間にわたってこの祭司職の任にあった。彼は生涯の最後の時期にあってさえ、非常に力に溢れたさまで、若々しさを失っていないかった。③ わたし自身のことについて語る必要はない。それは実に、老人特有の行為でもあり、またわれわれの年齢には許されることなのだが。

冒頭のキュロス（Ⅱ世）はアケメネス朝ペルシアの創始者で、前559年から530年まで王位にありました。ヘロドトスの『歴史』（1, 214）によれば、彼はマッサゲタイ族の女王トミュリスとの戦いで戦死しますが、クセノフォンの著作『キュロスの教育』は異なる伝承を伝えており（8, 7, 6）、キケロはこちらに従っています。またルキウス（カエキリウス）・メテッルスは、前264-241年に行なわれた第一次ポエニ戦争の際、前251年および前247年に執政官を務めた人物で、戦時下のその姿は、ポリュビオスの『歴史』（1, 39-40）ほかに描かれています。彼はその後、前243年から221年までの22年間、最高神祇官を務めますが、前241年、燃えるウェスタ神殿からミネルヴァの神像を救出するときに失明したとされます（ユウェナリス『風刺詩』3, 139；6, 265）。

さて上の一節は3つの文（①②③）から成っています。③は動詞に関して、直説法（2つの *est*、および *conceditur*）と不定法（*dicere*）で構成されていますが、①と②には直説法（①の *habuit* と *negat*、②の *meminisse* と *praefuit*）、接続法（①の *esset* と *fuisset*、②の *factus esset* と *requireret*）、不定法（①の *sensisse*、②の *esse*；なお①の *factam* の後に *esse* が省略されています）が含まれており、複雑な構造となっています。

今回は、このうち接続法に注目してみましょう。「接続法」という名は、主文よりもむしろ従属文の中で主に用いられるというその特徴に由来します。そして、直説法が事実の端的な表現のための法であるのに対し、接続法は意識の内部で想定された内容を表現するための法だと言えます。まず①の *esset* は、従属接続詞 *cum* で導かれる節に含まれていますが、この *cum* は、後続する節の中の動詞の法に関して、直説法を取る場合と接続法を取る場合があります。接続法を支配するのは、「歴史的 *cum*」の用法（②の *factus esset*）をはじめ、「譲歩」（①の *esset*）、「対照」「随伴」「（想定上の）理由」といった内容を表現する場合です。また接続法は、間接話法中の副文（①の *fuisset*）や、結果文（②の *requireret*）において、あるいは間接疑問文、目的文、可能的条件文、条件的願望文などにおいて用いられます。いずれも「想定内容」を表す場合です。

活用形に関して、①の *esset* および②の *requireret* は、いずれも能動態接続法未完了過去・3人称単数形であり、*esset* は *sum*（不定法は *esse*；仏語の *être*）が、一方 *requireret* は *requirō*（不定法は *requirere*；仏語の *requérir*）が各々活用した形です。接続法には、④現在、⑤未完了過去、⑥完了、⑦過去完了の4時制がありますが、⑧の接続法未完了過去形は、上記の通り、動詞の現在不定詞形の後に、一人称から順に *-m*、*-s*、*-t*（以上単数）、*-mus*、*-tis*、*-nt*（複数）を付すことで得られます。一方①の *fuisset* は、⑨の接続法過去完了形であり、こちらは動詞の完了不定詞形（この場合は *fuisse* [*<sum* の完了形 *fuī*】）の後に、上と同じ人称語尾を付すことで得られます（仏語の接続法半過去形に、この形成法の残影が見られます）。なお②の *factus esset* は、*faciō* の受動動詞 *fiō*（「なる」）の接続法過去完了・3人称単数形です。（あきやま・まなぶ）